

総括（在宅医療・福祉コンソーシアム長崎専任教育職員）

長崎大学医学部医学科助教
山之内 孝彰

在宅医療・福祉コンソーシアム長崎では、今年度も多くの授業科目を開講した。低学年を対象とした「在宅チーム医療早期体験学習」では、他学部学生の視点の違いを感じるとともに、自身の将来の専門職の在宅医療における役割を考える機会となったようである。高学年対象の「在宅がん治療特論」では在宅へ移行するがん患者に対する模擬カンファランスを学生自ら行うことで、学生自身が患者や取り巻く問題点を深く考察出来たと思う。来年度以降、さらに有意義だと感じられる科目となるよう、ブラッシュアップしていきたい。

長崎大学医学部保健学科助教
江口 真美

在宅医療・福祉コンソーシアム長崎の提供科目を受講した学生は、在宅がん医療および緩和ケアについて学び、今後の自分自身の課題や自分には何ができるのか考えており、在宅がん医療・緩和ケアについて意識を高める機会になったと考える。多学部で学ぶことで、新たな視点に気づき、多職種連携の必要性も理解できていた。多職種連携にはコミュニケーションが重要であり、在宅がん医療・緩和ケアについて学ぶと同時に、色々な専門分野の学生と関わる中で連携する能力も養える場となるよう、今後も努力していきたい。

長崎大学歯学部助教
介田 圭

薬学・看護学の統合教育体制に医学・歯学等の教育者を加え、「長崎薬学・看護学連合コンソーシアム」事業を、さらに拡大・充実させた「在宅医療・福祉コンソーシアム長崎」が組織され、約1年が過ぎた。在宅医療・がん医療・緩和ケアに関わる専門職連携教育を大学間合同実習として実践できるカリキュラムを作成し、多職種協働の理解がより深まり、大学間連携教育の実質化の第一歩を踏み出せたのではないかと考えている。来年度からは、その質の保証を図りたいと考える。

長崎大学薬学部准教授
江頭 かの子

今年度新たに立ち上げた科目である「地域包括ケア早期体験学習」は、低学年次学生が長崎市内の地域包括支援センターの実務見学・体験を通して、地域特性や高齢者をはじめとする地域住民のニーズ、それに対する支援などを学ぶ実習であった。初めての試みであったが、実習施設のご協力のもと、学生は医療と福祉、両方の視点から地域住民を支える必要性を学びとり、多職種連携について考える力をしっかりと身につけることができたのではないと思う。

長崎県立大学看護栄養学部看護学科准教授
吉原 律子

多職種と連携して行動する能力は「患者（療養者）のQOL向上を支援する」という共通目標をもつ医療・介護職には必須のものである。そしてこの一年、本事業の取組みがその能力育成につながることを参加した学生の皆さんが教えてくれた。来年度は、それらを基に、各専門性を理解することとそれらをつなぐことの意味、そのために何が必要かを学生の皆さんが主体的に学び合えるよう、広報を含め支援していく。

長崎国際大学薬学部准教授
岩下 淳二

学生参加型の早期体験学習や「在宅がん治療特論」では、初めて目にする現場の専門職のことや自身が目指す専門職以外の職種にも強い関心を示し、進んで学習する姿勢が見られた。在宅医療の現場や地域包括支援センターの訪問を通じて患者さんや介護利用者の立場に立った生きた学習ができたものと評価している。来年度は長崎国際大学では新規に2つの科目を立ち上げるようになっており、より充実した科目の開発に努めたいと思う。